

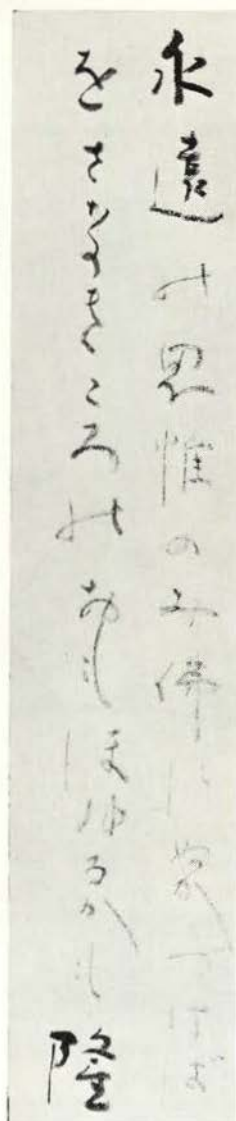
土 淨

1976 - 7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 特別授承認雜誌 第三二五号
昭和五十一年六月二十五日印刷 昭和五十一年七月一日発行
第四十二卷 第七号



S. Iku



永遠^{とこしえ}の思惟のみ仏にぬかづけば

をさなきころのおもほゆるかも

佐竹隆三

(大正大学教授・医博)

思惟観音の像にぬかづくとおのずから心がすなほになり、

子供の頃のことを思いだし、静寂なやすらぎのなかにつつまれて、無条件にただひたすらに有難いという気持ちになる。人間の記憶は何才頃までさかのぼれるかは、個人差もあることではあるし判然とはしないが、私の場合三、四才頃ではないかと思う。私が宗教的なものにふれたのは三才頃らしいが、私の記憶にはない。父系の祖母に連れられて当時の私は素直にお寺詣りに行き、足のしびれも訴えずきちんと正坐して、行儀の良い子供として老人達からほめられ、それがまた自慢で祖母が私を寺に連れてゆくということに

なったらしい。

私の記憶に残っている祖母の像は、或る夏の夕暮に、西日で紅く染った白壁の蔵を背景に、西方浄土を拝んでいる姿である。前後の脈絡なしに、太陽に向けて合掌する祖母の姿が鮮明に浮び、その表情の安らかさといったらうらやましい位である。何の教養もない、一介の田舎の開業医の母親に過ぎない祖母に、仏教の教えがどれ位理解できたかは疑わしいが、それでもなおかつこのような安心立命の境地に祖母が達しえたとするならば、やはり法然の思想は偉大であったと言わねばならないであろう。

七月号



目次

俳句に写ったお盆のころ	野島 無量子 (2)
現代とこころのシリーズ⑥	
大衆に生きる歌のころ	丘灯至夫 (6)
三人の俗師とトンチンカンな生徒	加藤子明 (10)
浄土の教えと孟蘭盆会	金子寛哉 (15)
南国旅情③	宮林昭彦 (22)
日本仏教の宗派 ② 南都六宗(二)三論宗	(26)
浄土教の流れへ七〇自念仏と他念仏	竹中信常 (28)
法数術語十二カ月(七月の巻)	宝田正道 (33)
念仏ひじり三國志(二十七)法然をめぐる人々	寺内大吉 (37)

表紙 久住 静雄画

カワト 大正大学美術部



俳句に写ったお盆のこころ

のじまむりようし
野島無量子

(俳人・ホトギス同人)

○

昔から日本の民間では、薬師如来、地藏菩薩、観音菩薩が多く拜まれて来た。その中で地藏菩薩は母の心に通うものがあるので特に子供に親しまれて来た。

『地藏本願経』というお経がある。母の心を説いたものとしてこれまた親しまれて来た。

「是の如く我聞く。一時、仏、忉利天にましまして母のために法を説きたまふ」

とあるが、お釈迦さまの母上摩耶夫人が、太子の産後七日にしておかくれになった。そして、天上界へ生れた。

その後太子が悟りを開いてから、亡き母のことが気にかかり、天上界へ行つて、母上のために開悟の法を説かれたのである。前の経文がそれである。忉利天は母を慕う子が母を得脱させようとする孝養の道場である。『地藏本願経』に忉利天の説法が出るのは、このお経が母と子の心を表わそうとしているからなのである。

その『地藏本願経』には、ある仏さまの時代、一人の娘があった。母の行方がわからないので気になって、仏様のおまつりしてある所へ行つて「どうか母の行方を教えて下さい」とおねがいたところが、仏さまは「お前のそのおがむ功德で母の居所を教えてやろう」といって、

その母は地獄へ落ちていることを教えられたのである。

娘は驚いて、その地獄をたずねてゆくと、その母なら、二十日程前に娘が仏詣りをした功德で、天上界へ生れているという話が出ているのである。

ここで、『地藏本願經』は母を説かんとしていることがわかるであろう。

これと同じ話が『孟蘭盆經』にある。仏弟子の目連尊者とその母の話である。目連は神通力が開けて、その母が餓鬼道にあることを知った。悲しんでこれをその神通力で助けようとするが及ばなかった。そこでお釈迦さまにこれを訴えてその教えを乞うのである。

ここでお釈迦さまが教えられたことは、多勢のお坊さんに集まってもらい、その協力によって救うていただけたという話が元となって、『孟蘭盆經』が説かれているのである。

人間には母を探す心、母を求める心が無くならない。赤ん坊が懸命に母を求めるあの気持、乳をさぐるあの手は即ち母を求めている姿である。

その母にいろいろ苦勞させた、こんなことも、あんなことも、悲しませ、くやませたという想い出の果てをさ

ぐれば、そこは地獄であろう。母が地獄に堕ち、餓鬼に生れたのではない母を地獄に追いやり、餓鬼に趣かせたのであるという悔恨と懺悔を拭い去る道、それは神通力でも徹らない。ただ、母のためにいいことをさせていだいたと得心の行くことをさせてもらう外はなからう。お釈迦さまは、そこで目連に法供の儀式を教えられたのである。即ち、

「十方の衆僧、七月十五日、僧自恣の時——自恣は隨意、安居のこと——現在及び過去の父母の厄難の者の為に、飯、百味を具え、世の甘美を尽して盆中に盛り、十方の大徳の僧達を供養すべし」

これがお釈迦さまの指示であった。また、僧達には、「先ず施主家の為に呪願すべし、禪定に入りて祈念せよ。その後に食を受けよ。その時、先ず仏前に安在し、呪願終つて食を受けよ」

即ち供養の人、施主は精一杯、受施の人は供養すべきである。受施の人は施主の人のためにま心のこもった祈念をして、後にこれを受けるべきである。そこでこの日、僧達はあるいは山間に禪定し、あるいは樹下に座してお勤めしてから、ま心をもって盆のものをうけて清浄

戒を具し、「その徳汪洋たり」とあるように心の清まる話である。また、現世の供養を受くるものが大いに反省を呼び覚ます説法である。「時に目連の母即ちこの日に於て一切餓鬼の悲しみを脱し得たり」とある。

お盆は、このように法供と受施に依て成立する高貴な法事である。

末世に及んで次第にその実質はうすれて、今となつては、お盆は単に日本の季節を表す語となつてしまつた。

そして、そのお盆の行事は七世の父母を改めて思い出している家族と先亡とのふれ合いの場となるもので、その意味で墓参、魂祭、棚経などいろいろの様式が生れて来た。ほんとの意味のお盆は消えたようであるが、しかし、庶民の中に形をかえながらもお盆は生きている。それは多くの歌人俳人によって、それが捉えられ、写されているのを見ても、人間の感覚、感情の鋭どさに感嘆させられるものがある。

例えば、前に、二、三述べたように、迎鐘、魂祭、霊棚、棚経、施餓鬼、墓参、盆の月、盆踊、送火、大文字、燈籠流しなどを季節としてお盆の行事やお盆の心を詠っている、お釈迦さまの説かれた『盂蘭盆経』とはそ

の意味が變つてしまつたが、現代の私たちには、これ等の句が現代のお盆らしい気がするのである。お盆の真意はうすれても、今もつてお盆の季節が来ると庶民はそのお盆を通して七世の父母にまで、心を通わすことは結構なことだと思ふのである。

○

迎 鐘

旅人の鳴らして行くや迎鐘

一 茶

迎鐘手ごたえありてありがたき

草兵衛

迎 火

迎火や母のよはひはとうに過ぎ

つや子

風が吹く仏来給ふけはひあり

虚子

魂 祭

おもしろき人にてありし魂祭

把 栗

後添ひの話ありつつ魂祭

鬼 風

▽後添ひの話が今現にあるのであるが魂祭をしている亡妻のいろいろの想い出が湧いて話を進めたものか、それとも生涯独身をつづけようか、妻に逝かれた人にだけわかる切実な句である。

霊 棚

霊棚に迎へたる灯をうつしけり
魂棚や供物の中の旱茄子

歌 村
雨 意

施 餓 鬼

つづれたる本家に代り大施餓鬼

都 穂

墓 参

墓参り妻と代りて子を抱き
掃苔やおんいたはしき御一生
お往持に見忘れられて墓参り
掃苔や人の身の上我が身の上
掃苔や孩児の兄が世にあれば

為 郎
年 石
無量子
同 同

送 火 大 文 字

送火や母が心に幾仏

大文字今は消えゆくばかりかな

百万の仏発たしめ大文字

大文字は京のいとなむ大法事

虚 子
不 彩
無量子
同

流 燈

燈籠の灯の細りつつ流れけり君枝女

○

その他、お盆を捉えた句は無数にあるが、その多くは、先亡の面影を後世の人のまぶたに写しつつ、先人と後人との出会いの機を得たる感慨が詠われている。亡き母に苦勞をかけた償いを、現世では果せぬ悩みを、お釈迦さまによって教えていただいて能うかぎりの供養のみがこれを果すことが出来ることを知るのである。かつまたこれを受容する者に至誠の呪願を教えられて倒懸の苦が救われるという所謂、能施と受施の真実を示された『孟蘭盆経』から出たお盆行事が、現代のともすれば非情に流れ易き人心に反照の好材となればと願うものである。

大衆に生きる歌のこころ



丘^{おか}灯^と至^し夫^お

(作詞家)
日本コロムビア専属

西条八十(さいじょう やそ)。詩人である。芸術院会員でもあった。

鬼籍に入って七年になる。亡くなったのは昭和四十五年八月十二日。七十八歳だった。

詩人だが、大衆歌謡の大家でもあった。大衆にひろくうたわれた多くの歌を残した。この詩人に面白い話がある。

太平洋戦争後しばらく……。民間のラジオが、放送をはじめたころだった。三越デパートが、爽やかな歌謡を世に送ろう、ということとで、「三越ホーム・ソング」を、毎月こしらえた。作詩は西条八十が委嘱された。

この仕事をはじめのに先立って、三越の社長が、この詩人を、一席設けて招いた。

席上、まず三越の社長がひとこと弁じた。

「ちかごろは、くだらない歌が多すぎるようです。あ
あいう歌は作りたくないものです……。たとえば『トン
コ節』のような……」

西条八十は、

「実は、あの歌は私が作ったもので……」

という、いささか困った社長は、

「そうですか、いや、あの歌はともかく、芸者とチー
クダンスを踊るなどという『芸者ワルツ』、あれはひど
い歌で……」

と言葉を重ねてきた。ここで西条八十、いささか、ぶ
然としながらも、

「あの歌も、実は私のもので……」

と苦笑しながら、しかし、少しも騒がず、

「三越さんにも、上は貴金属売場から、下は台所、ト
イレ用品の売り場までおありになるように、私の作る歌
も、ダイヤモンドから、トイレット・ペーパーまであり
まして……」

この言葉で、社長もホッと一息。一瞬しりかけた座
も、賑やかになったという。

この当時は、「トンコ節」や「芸者ワルツ」が一世を

風びするということは、大衆のころを、どこかで大き
くつかんでいたことになるのだろう。

その後、「三越ホーム・ソング」も、健康な良い作品
を、かずかず世に送ったが、「トンコ節」や「芸者ワル
ツ」の爆発的な流行には、ついに及ばなかった。

大衆歌謡は、形ではなく「こころ」だ、という証拠で
ある。

私が、この西条八十に、はじめて師事したのは昭和七
年だから、足かけ四十年近くお世話になった。

私がコロンビアレコードで、歌づくりをするようにな
ったころ、私はこの詩人から、こんな話を伺った。

「キミ、若いうちは、頼まれても学校の校歌は、作る
もんじゃないよ。自分が束縛されてしまう。自由に恋愛
も出来なくなる。大勢の子どもたちのために歌を作った
者が、変なスキャンダルを起こしたら、子どもたちが可
哀想じゃないか……」

つまり、学校の歌などは、アダオロソカに作るべきじ
やない……という教えだった。

私はこの教えを守った。校歌を多く作るようになった
のはちかごろのこと。幸い、コンビの作曲家に、同郷の

先輩である古関裕而さんがいるので、昨年も、埼玉の城

西大学、おなじく歯科大学、福島県の古殿中学校歌など

を、それぞれこしらえさせて貰った。

こういう話もきいた。

「なにが難しい、といって、病院と保険会社の歌ぐらい作りにくいものはないよ。早く病気になるっていらっしやい、とも書けないし、あなたが死ねば保険金が入るよ、なんて歌も作れないじゃいか……」

なんでも作ればいいというものじゃない。それぞれあたえられた宿題に、アタマをひねるばかりでなく、歌には「こころ」をこめなければいけないのだ。

これはやたらに引受けられないゾ、とキモに銘じた私も、ちかごろは年齢のせいもあるのだろうか。さきごろは、お寺さんから頼まれて、彼岸会讃歌を書いた。

へ山河けわしき 世なれども

仏の教え ひとすじに

彼岸に至る しあわせよ

ああ あめつちに 陽はうらら

久遠の救い ここにあり

——以下二、三番歌詩略

これが一曲、レコードは片面では成立たないので、もうひとつ、ご詠歌をまとめた。

へ親も子も、仏の道にvariなし
生きて彼岸を 迎うしあわせ

へ空青く 松も緑の み仏に
子らが捧げる 彼岸花かな

へみ仏も しあわせ満ちて

おあすなれ
彼岸会の朝 香華満ち満ち

宗旨は違っても、仏の道はそんなにvariはなからうと思ふし、仏の「こころ」については、ひと筋だろうと考えて、私はこの歌をまとめたが、幸いに、生かして使つて頂いているようである。

作曲は古賀政男さん、歌つてくれたのは島倉千代子さ

んだった。

生来、体が弱かった。二十歳か三十歳まで生きられれば上等だ、と主治医がひそかにいっていたという私だった。

年がら年中、病気に追いまわされているような生活がつづいた。労働はとてもむかない。キチンと朝から晩まで執務するサラリーマンも、長くはつづかない。

よくしたもので、適当に生かしてくれる道があった。それが作詩の道だった。

職業とするようになってから、すでに三十年に近い。怠け者で、数は多くない。しかしレコード会社との契約で、一応一カ月に二曲を作ることになっているので、ざっと数えると六百曲ほどになろうか。

しかし、考えてみると、やはりあとあとに残る歌には、「こころ」があるようである。

岡本敦郎君が歌ってくれた「あこがれの郵便馬車」や「高原列車は行く」には、病弱で修学旅行にも行けなかった、少年時代の私のあこがれがこめられている。

コロムビア・ローズさんの「東京のバスガール」には

淡い愛情。二代目ローズさんの「智恵子抄」には、高村光太郎夫妻の清冽な愛への感動……。そして舟木一夫君のヒット作となった「高校三年生」には、ふたたび還らぬ若き日への郷愁……。など、など。

こうして、歌を書きつづけてきて、いつの間にか還暦になる。

人間のいのちは、病気などでは負けない。寿命である、などと考えるようになっていく。

それにしても、ちかごろの流行歌の世界。「こころ」を見失って、「ほんのう」だけがはびこっているように思える。

へあてもないのに誰かが欲しくて、汗ばむ街へ……
(二十歳の微熱) 異性さがしに出かけてゆくかと思えば、
へあなたの甘いくちづけが、私の未来を決めるのよ……
(未来) と、すぐに抱かれたがり、ついにはへバジヤマのままで走ってきたの……(愛に走って)と、まるでストリーキング、羞恥心ゼロ。あげくの果ては、へまだまだ小さい君の胸、僕の手のひら大きいよ、くらべてみようか、そり、そり……(春うらら)と、ボルノ満出とな

る。

さて、歌はつぎつぎに生まれてくる。歌が無くなるときは現世消滅のときだろう。しかし、あとあとまで残る



三人の俗師とトンチンカンな生徒

加藤子明

(金花會社長)

歌は、「ほんのう」だけではなく、「こころ」のこもる歌、というのは間違いのないところだろう……。

(一九七六・六・六)

◇

いま想ってみても。私の伯父という人は随分トンチンカンだったと思う。小学校三年のとき、わが座右のマンガ「のらくろ」をこの人に見つけられ、ノラクロとはノラクラなことである、以っての外であるとかミガミ叱られた上、取りあげられてしまったことがある。幼な心に

も随分トンチンカンな伯父だと呆れ返ったが、その後、長じても老境の伯父が「しかし阿弥陀さんは、なぜ人が死ぬときしか来てくれないのだろう」と首をかしげているのかいまみて、トンチンカンはこの人の身上なのだと、再確認したことである。

ところが近頃、われとわが身をかえりみてハツと思いが多過ぎる。蛙の子は蛙。血筋は争えないというも

のだろうか。

今年の春、和順会館で幸運にも鵜飼隆玄上人から、御法話をうかがうことができた。「他力」についてのお話だった。人は自分で生きているのではなく、先祖や社会環境によって生かされているのだという御趣旨で、他力を信じるからこそ宗教の真実の要諦であると教えられた。

知識としては一応知っている内容のはずだが、上人のお話がうまいせいとか、私は拝聴しているうちに身につまされてきて、大いに感銘を覚えた。それというのも中小企業界のはしくれにいる私には、世間のおかげさまで今月もなんとか無事に会社を生きのびさせて貰いましたという実感が、幸か不幸か、一年中つきまとい離れないからである。わかりやすくいえば、手形決済のたびにヤレヤレ有難やである。

なるほど、それならば私もまた実に浄土的なのだと、上人のご法話をきいているうちに気づいて感動したのだから、ひょっとすると、せっかくのご法話をかなりトンチンカンに理解してしまったのかもしれない。

◇
だが今はお許しを頂いて、その理解の一端を披瀝してみたい。

まず第一に、慢性的な資金繰りに追われている日本の中小企業家は、金利と口銭の上にあぐらをかいている大企業経営者にくらべると、心情的には、よほど浄土的である。

その大企業のなかでも、根幹産業や国策会社の経営者となると、ご存知のとおり、オレがこの社会を養っているのだとばかり常日頃、唯我独尊でまかりとおっている。だからこういう人には、浄土の世界からみると大変な外道なのではあるまいか。いくらお寺にお金を寄附したところで、イマワのキワに、阿弥陀さんは迎えにきてくれないにちがいない。

ところで実は、戦後のわが国の生産力の八割、九割を担っているのは、われら中小企業なのだ。数というなら製造業や卸小売業をあわせて二百五十二万社が、日本の中小企業である（昭和五十一年度版、『中小企業白書』）

この龐大な事業主が多かれ少かれ浄土の心情を共有しているとするれば、経済大国とかの日本は、目に見えない

世界では実に驚くべき浄土王国でもあるということになる。

モノを買ってくれるお客さまあって始めて成りたつのが企業だから、お得意先、世間、社会など一切ひくくめた、いわば他力によって企業は生かされている。その他力の象徴たる阿弥陀さまには、自然に感謝の気持が湧いてくるだろう。だからもし優れた組織者が現われて、全国の事業主がわが家の宗旨とのつきあいとは別に、年に一万円づつでも感謝報恩の志納を元祖の浄土宗に托したら、どうなるだろう。一年に二百五十二億円。単純計算でも十年で二千五百億。かくて浄土宗の興隆はわれら中小企業層よりということになる。と書いていると、もう本当に話がトンチンカンになってしまった。

だいたい、こういう計算をしたがるのは、ふつうは無責任な口舌の徒であって、堅実な事業家のなすわざではない。どうやら私は堅実な事業家とはまだいえないようだ。考えてみると、私はもともとその口舌の徒の出身で、たとえばこんど浄土宗の出版事業協会の主幹になられた宝田正道師には、中央公論社の編集者をやっておられた時代に、いろいろお世話になった恩義もあるほど

だ。あの頃は、評論を書いても、自分の中にある自分本位の基準をもとに世界を判断していれば、それでよかった。全く浄土的ではなかったようだ。

それが、十三年ほど前に突然、中小企業家に変身することになった。それまでのように、わが家族だけの口を糊するのではなく、数十家族の実生活に責任をもつことになったのだから、わが胸の底にある偏狭な基準などは、もはや何の用もなさい。だからそのときは格別な「誓い」が、私には必要となった。

今後は最大多数の顧客の要求に、徹頭徹尾、自分の考えを合わせていかねばならない。それならば、いっそのこと私が会社を支配するのでなく、お客様というものを会社の真の支配者にしていこう、という誓いである。根からの商人なら、わざわざ誓うまでもなく当り前のことなのだろうけれど、そこが中年の新参者の悲しさで、大げさに誓わないと体の自由がきかないのである。

以来、常住坐臥、顧客本位を目標にしてきたからこそ、鶺鴒上人のご法話も、人一倍、身につまされたのだと思う。

では、どんな仕事をやっているのかというと、仏教図

書の刊行と仏教工芸品の製作とがわが社の業種なのだから、私の変身も仏縁というよりしかたがない。資本金二千万円、年商約五億円、立派なビルもなければ社員も三十人足らずというのが今年の姿である。中小企業といっても、かなり小の方で、正確には小規模経営者というのが私の肩書のはずだ。近頃は、寺院社会ではわが社の名前より、あの『月刊住職』を出しているところ、と云った方がすぐ分ってくれる。図書の方は学術専門書だけで、そのせいか従来刊行した図書は一点残らず、全国図書館協会の推薦図書に指定されているのが有難い。この秋には幻の名著といわれる『印度学事典』（山本智教訳）を刊行の予定である。工芸の部門で、仏像、祖師像、銅像、その莊嚴具を製造している。この価格ではこれ以上立派なものは日本中どこを探しても決してない、というのがこの部門の目標である。わが社では、お客様が真の社長なのだから、これは至極当然の話だ。



さて、いまの私には三人の俗師がいる。俗人の師というほどの意味である。

一人は創業当時から片腕となってくれた昭和九年生れの長沼宗裕さんという人で、この人の信条はこうだ。「この世の中にムダなもの一つもない。部分が生きなくては全体も決して生きない」。云うは易いが、この人の場合は文字通りの知行一致で、日常、何事につけてもこの信条どおりの態度を貫いているから立派なものだ。私などとてもかなわないから、心中ひそかに師と仰いでいる。

もう一人は直接のおつきあいはないが、経営コンサルタントの一倉定という人である。あるとき、中小企業のバカな社長はみんな私の話をきくと云わんばかりの広告文で経営講習会があった。私のほかにもどんなバカがいるのだろうか、好奇心にかられて出かけてみた。すると百人ほど入る会場に溢れるばかりのバカ社長がいて、その頭上で一倉先生が、ありとあらゆる罵詈雑言を浴せているのには一驚した。さらに驚いたのは社長たちが、誰一人腹をたてず、首をうなだれて小学生のようにおとなしく聞き入っている光景だった。高い講習料を払って入場したのだから、聞かずに帰っては損だと思っていたのかもしれない。或いは中小企業家は哀れにも、叱られ

たりいじめられたりすることには慣れきっていて、むしろ被虐的な快感を楽しんでいたのかもしれない。私としても、多分その両方で、最後まで皆と一緒に聴講したことである。これが上場会社の社長族だったら、席を蹴って退場していくことだろう。また一倉氏も大会社の社長が相手なら、こうはバカ呼ばわりしないだろう。つまりこの先生は中小企業主というものを、骨の髄まで知り尽くしている人なのだ。果せるかな、その後この先生の書物が刊行されたが、これほど感銘をもって読んだ経営書というのはいない。試みに読んでみようと思われる向きは、日本経営合理化協会というところに問い合わせると、教えてくれるだろう。恐ろしいから会いたくはないが、わが師の一人である。

最後の師は、わが社に在る二十五歳の青年だ。橘厚男さんという、福島県で中学を卒業して就職した人だが、この人と一晩、コペルニクスの地動説をめぐる大論争を行なった末、ついにわが師の一人に拝招したものである。それというのもこの青年は、万人が天が動くのを信じたのであれば、自分一人で地が動くと言ってもムダな上、ソンであるから自分は決してそのような愚かなこ

とはしないと、心の底から主張したのである。私は大いに立腹し、青年の風上にもおけないくだらないやつだと思ったりした、同席した大学卒の青年社員たちも「百万人といえど我いかん」って文句を知っているかねなどと云って、しきりにいらだっていた。しかし彼の徹底した大勢順応の態度には、「結局ボクはあんた方よりは長く生きのびてみせるぞ」とでも云いたげな、確信に満ち満ちていた。そういうえばこの若さで、貯め続けた金を頭金にしてすでにマンションを手に入れ、近く結婚することになっている。夫がこういう精神をもっていれば、夫婦げんかもないだろう。しかも、どのお得意からも好評判の青年である。考えてみると私もコペルニクスのことなら勇ましいことを云っていられるが、中小企業の現実だって、生き残るためにはしよせん天下の大勢に……などと、変身後の私だから、いつのまにか考えこんでしまった。最後に、今日から君を大事な先生だと思ふよとつぶやいたら、この青年が叫んだことばが印象的だった。「そんなトンチンカンなこと云わないで下さいよ」。

今は西方浄土にいるはずの私の伯父が、この話をきいたら何というだろうか。



浄土宗の教えと盂蘭盆会

金子寛哉

(大正大学講師)

(一)

お盆になるといつも思い出すのは、暑い日盛りの中を、汗をふきふきテクテクと歩き廻っている、まだお寺へ行つて間もない頃の、自分自身のお棚参りの時の姿である。田舎では、夏休みと、お盆休みとが一緒になり、遠くへ行っている仲間が帰つて来ると、町が急ににぎやかになり、にわかにクラス会等が開かれる。これもまた、田舎のお盆を知っている者には懐かしい思い出の一コマである。しかし、私は何時もその楽しい集いには加わることが出来なかった。

お寺に入り、或はまたお寺で育った者の多くは、皆同じような思い出を持っている。お盆行事中のお寺は多忙

で、クラス会どころではなかった。そうした何年かを田舎で送り、後に東京へ出てからは、そんな思い出も次第に忘れかけている。それ程東京での生活はあわただしいのかも知れない。

古人の、言い古された俳句の中にも、独特なお盆の風俗や、心情が詠い込まれている。たとえば、

精霊棚の奥なつかしや親の顔

心にて顔に向う也魂まつり

在りし日の背を洗うごと墓洗う

盆はうれしや別れた人がはれてこの世に会いに来る等々である。これらの句を口ずさんでいると何となく、今のクラス会への思い出につながるような、素朴な情感がただよっている。これを更に何遍も何遍も繰り返して

いると、クラス会への淡い想い出とはまた違った、もつともつと深い、沢山の人々の心情にひたつて行く、何とも言えない重さと深さが伴ってお盆の想い出が甦えってくる。

私はもともと、在家の出であつたが、お寺に入つてもなく、お棚経に歩いた頃には、ただもう夢中で、渡された経文を暗記し、それを唱えて廻るだけで精一杯であつた。その唱える経文の意味がいったいどのようなものなのか、などと考える余裕など、全くなかつた。少し気恥かしいのと、経文を読み間違えてはいけないと言う気持ちとで、ただもう一生懸命であつた。

お盆のいわれを聞いたり、またそれを調べて見ようと思ふようになったのは大分あとになってからのことである。最初は、何も知らずに、ただもう夢中で廻つていたのだが、お檀家の人達はそれを別に聞きただすようなこともなく、お檀家へ行つて読経し終ると、気持ち良く迎へ、暑さの中を良くそとはかり労をねぎらつてくれた。今からその頃のことを考えると、全く不思議な気がする。

尤も、お檀家のお爺さんやお婆さんは、小僧の私より、長い間の生活の実感を通して、お盆行事の意味をはるか

に良く知つていたのだろう。また、お盆のいわれとしては知らない人達でも、それなりにお盆行事の意味を理解し、特別に聞く必要を感じなかつたのかも知れない。わざわざ聞かずとも、おのずとお盆行事の心が解つていたのだと思う。それは丁度、古人の俳句の中に詠い込まれているような、素朴でしかも純粹な形で。面倒な理屈は一切抜きにして、それぞれの人々の心と心の中に、生きた形で承け伝えられていたものと思われる。

(二)

お盆とはもともとインドの言葉でウランバナ(cullam-bana)と言い、それに漢音をあてて「盂蘭盆」と標記したのが、のちにウラボンと言われ、それが略されて「盆」と言われるようになったのだという。この語のものと意味は「倒懸」と言い、逆さづりにされた時の苦しみを意味すると言われている。しかし、最近ではこの原語をウランバナ(cullumpana)とし、「済度」の意味であるとする説もある。それはとも角、いずれにせよ、貪・瞋・痴の三毒煩惱に迷わされ、その業によって受けた、果報である苦しみの世界にあえいでいる人々を、その境涯か

ら救い出そうという仏の慈悲心がもとになってその説が展開されている点では変りがない。

このようなお盆行事のもとになっている。『盂蘭盆經』の説は、中国でも早くから一般に広く伝えられていたようである。この經の内容は、中心人物である目連とその母との間にかわされた報恩行が中心になって述べられている。そしてその亡き母への報恩行の手だてを仏が教えてくれているのである。

したがって、お盆行事の中心にあるものは何と云っても父母、ひいては遠い昔、早くに亡くなられた肉親の人々へ想いを寄せ、それを供養することにあると言える。

この『盂蘭盆經』のほかに、現在知られているお經文に『浄土孟蘭盆經』と言うものがある。しかし、この經も、多少その説が詳しくなっているが、骨子は今の經と、大体同じである。その經名から当時浄土の教えと深いかわりをもつてこの行事が中国で行なわれていたことも考えられる。

中国では早くからこの種の報恩行が行なわれ、広く一般の民衆の間に語り伝えられていたようである。そのよ

うな經典は、もともと印度にあったのではなく中国に仏教が伝えられてのちに、中国的な考え方の中に作られたものであるともいわれている。そのような經の中で、今日でも広く読まれているものに『仏説父母恩重經』がある。この經は専ら父母への報恩を説いたものであって、お盆とは直接関係してはいないが、当時一般に広く読まれ、また報恩行へのいざないをおし進めていたことは確かである。この『父母恩重經』は日本でも早くから広く読まれ、今日でさえこの經文を読む人は非常に大きな感動を受けている。それが中国で出来た經典であるということ、經文としては低く扱われる事もない訳ではないが、しかし、このように広く、深く、多くの人々に読まれ、語り伝えられて行くのは、最も良くその人々の心情に合致していることを示しているとも言える。それは丁度浄土宗の念仏の教えが、広く、深く、多くの人々の心の中に生きて働きかけ、承け伝えられて行ったのにも似ている。

(三)

ところで浄土宗においても、お盆は大切な行事である

が、この報恩行ということについてはどのように考えていたのであろうか。浄土宗祖法然上人が今から八百年程前に浄土宗を開くにあたって、もっとも強く信頼された人は、中国唐代の善導大師という方である。法然上人はひとへに善導一師による、と言って、浄土宗を開かれたのである。従ってこの善導大師という方は、浄土宗にとって最も大切な方であるといえる。この善導大師には幾つかの著述があるが、その中に、浄土宗の依り所となる、『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』の三部のお経文の中の第二の『観無量寿経』を註釈した『観無量寿経疏』四巻という書物がある。この書の中の第二巻、『観經序分義』の中に、『観無量寿経』の「父母に孝養する」のお経文を註釈する一段がある。今、その註釈の文を通して、善導大師の報恩に対する考え方を見たいと思う。少し長文になるが、以下にその文を意識してみよう。

孝養父母というのはこれは一切の人々（凡夫）は皆縁によって生ずることを明すものである。その縁というのは、化生あり、湿生あり、卵生あり、胎生ありさまである。ただしこれらの生が相いよって生ずると

すれば、それらのものには皆父母があるはずである。既に父母があれば即ち大恩がある。何故なら、若しも父がなければ生まれさせる原因が欠けるし、また若し母がなければ生んでもらえる縁がない。若し父母の二人がともにいなければ、全く生まれて来るすべがない。したがって、生をうけるには必ず父と母の縁が具わって、はじめてこの身を受けることが出来るのである。誰でもこの身を受けようとする時には、自らの業識（ごうし）内の因とし、父と母の精血を外の縁として、因縁和合してはじめて此の身が存在するのである。この意味から言っても父母の恩は非常に重いものである。また母の方は特に、懐胎すれば十月を経過するまで、行、住、坐、臥、常に苦惱を生じ、またお産の時にはその生命をも落しかねないという災難のあることを憂える。またそれらのこともなくして無事に出産し已ればおわたで、三年過ぎるまでは常に子供の屎尿の中に眠り臥して、床も、そのおおいも、衣服も皆亦不浄である。そしてその子が大人になると、自分の妻だけを愛し、我が児のみに親しんで、父母の処においてはかえって、憎しみを生じ、受けた恩に報いるべく親に對

して孝行を行なわない。このような者は全く畜生と変わる所がない。

また父母は世間の福田（福德を生み出す田の意）の最高のものであり、仏は出世間の福田の最高のものである。

釈尊がまだ健在でいた時のこと、ある大変な飢饉に見舞われた年があった。多くの人々は皆食べるものもなく、餓死して白骨が道のあちこちにごろごろしていた。こんな時だけに、お坊さん達が乞食に歩いてもなかなか食べ物は何れなかった。

この時お釈迦様は他のお坊さん達が皆帰ってしまふのを待って、自分独りだけが城に入って乞食に行かれた。朝からお昼に至るまで、家々の門にたつて食を乞うても、食を与えてくれる者はいなかった。仏は空の鉢のまま、むなしく帰られた。あくる日もまた乞食に出かけたが、また得られず、その翌日もまた行かれたが、やはりだめであった。その時、突然一人の比丘が現われ、道で釈尊に逢われてそのお顔を見ると、何時も光り輝いている釈尊のお顔が少しやつれて、飢の相が見られた。そこで比丘は釈尊に問うて言うに、「世

尊よ、もうお食事は已にお済みになられたのですか」と尋ねると、釈尊は「比丘よ、私は三日程まえから、乞食に歩いているのですが、いまだに一匙の食物も得て居りません。私は今とても空腹で、あなたとこうして話し合う力さえもない程です」といわれた。

この比丘は、釈尊の話すのを聞きおわって悲しみにくれ、泣いた。そして独り考え、つぶやいた「釈尊はこの上ない福田であつて、衆生を護つて下さるお方だ。私は今この自分の着ているお衣や、お袈裟（三衣）を売って、一鉢のご飯を買い求め釈尊に供養しよう。今こそ本当にそうすべき時なのだ」と。

このように考えた比丘はすぐさまこれを実行し、一鉢のご飯を買い求めて、大急ぎで釈尊の所へもどり、これをおあげした。

釈尊はこの比丘の思いやりのある気持と、その行爲は皆良く知っていられたが、ことさらにこの比丘に問うて言われた。

「比丘よ、今年は飢饉の為に食物がなくて多くの人々は皆餓死している。それなのにお前はどこからこのようになまじり物のない一鉢のご飯を得て来られたのか

ね」と。比丘は先程考え、行なった通りのことをつぶさに釈尊に申し上げた。

これを聞いた釈尊がまた言われるには「比丘の三衣というのは、過去・現在・未来の三世にわたる諸仏の幢相（はたしるし）である。これらの衣はその因縁が極めて尊く、極めて重く、しかもまた極めて広大な恩のあるものである。お前は今、その衣をこのご飯に易えて私に与えてくれようとした。そのお前のやさしい気持は本当にうれしく思うけれども、私はこのご飯をいただく訳にはまいりません」と言う。

そこで比丘は重ねて釈尊に申し上げられた。「釈尊は三界の福田であり、聖人と言われる人の中でも最高のお方です。そのお方が、これをいただけにと言われるなら、釈尊を除いて外に一体だれが、これをいただくことが出来るのでしょうか」と。

釈尊はまた言われました。「比丘よ、お前には父や母がありますか、どうですか」と。

比丘が答えて言うに「はい有ります」と。これに対して釈尊は「お前は、このご飯をもってその父と母におあげしなさい」と言われた。そこで比丘が言うには

「釈尊ですら尚ただけにと言われるこの尊いご飯をどうして私のようなものの父母がいただけでしょう、とてもそのようなことは出来ません」と言う。

しかし、釈尊はまた重ねていわれました。「いや、いただくことが出来ます。何故ならば、父と母はお前の身体をこの世に生れさせてくれたからです。お前にとっては大変な重い恩の有るお方です。だからお前の両親にはこのご飯をいただく資格があるのです」と。

仏は更に語を次いで比丘にたずねられた「お前の父や母は仏を信ずる心が有りますか。どうですか」と。

比丘は答えて言う「父も母も全く信ずる心はありません」と。

そこでまた釈尊が言うには「今お前の父や母に始めて信心が起るでしょう。お前が今この尊いご飯を父母に与えるのを見るならば非常に喜ばれるはずです。この尊いご飯を与える因縁によって、きっと信心を発すでしょう。そうしたら、先ず最初に三帰依を教えておあげしなさい。そうすれば能くこの尊いご飯をいただくことが出来るでしょう」と。

このように釈尊から教えさとされた時、比丘は釈尊

のやつれたお姿をあわれみ見つ、その慈悲心の深さを敬い、お礼を言つて去つて行つた。善導大師はこの釈尊と比丘の對話を述べたあと、

このような非常に大切な意味があるのですから、人たるものは皆、すべからく父母に孝養しなければならぬのだと釈している。

このあと更に、仏母摩耶夫人が、仏を産まれて七日にして亡くなり、忉利天に生じた。仏は後に成道されてから、四月十五日に至つて、忉利天に向つて、一と夏の夏安居中母の為に説法されたという。これも十月懷胎の恩に報いる為である。仏ですら尚自らの恩を感じて父母に孝養されていられるのである。仏ならざる我我凡夫が、父母に孝養をつくさないで良いものであるうか。父母の恩は深く、しかも極めて重いものであることを知らなければならぬ。

等と記しているのである。浄土宗で善導大師を語る時には多くの場合、「一心に専ら弥陀の名号を念ずる」の文や、「本願念仏」を強調した点などを中心に述べられることが殆んどである。それがまた事実である以上、当

然であるが、しかし、ややもすると、その面だけ押し進められ、浄土へ往生することのみを説いて、現世における報恩行などは全く考えなかったかのような感も持ちかねなくなる。善導大師がそのような人でなかったことは、今記した「父母に孝養する」經文の註釈の中に充分読みとれたはずである。一心にお念仏を称え、また本願の念仏を信じて往生を願ひ、非常に厳しい自己反省を行なつた善導大師の教えの裏には、以上に述べたような面のあることも忘れてならないことの一つであり、このような裏付けのないお念仏であれば、単なるはばの狭い、薄っぺらなお念仏になってしまうのではないかと思われる。

このような善導大師の考え方は今日も浄土宗の信仰のあるべき姿として、考えなければならない点であり、同時に又、今日までこのお盆行事の報恩行の中に生きつづけているものと信ずる。

最初にも述べたように、お檀家の人々は長い人生経験の中で浄土宗のお念仏の中に含まれている。このような心が自然にくみとられ、年々めぐってくるお盆の行事をやむことなく今日も続けているのだと思われる。



南国旅情



|| スリランカ仏跡めぐり ||

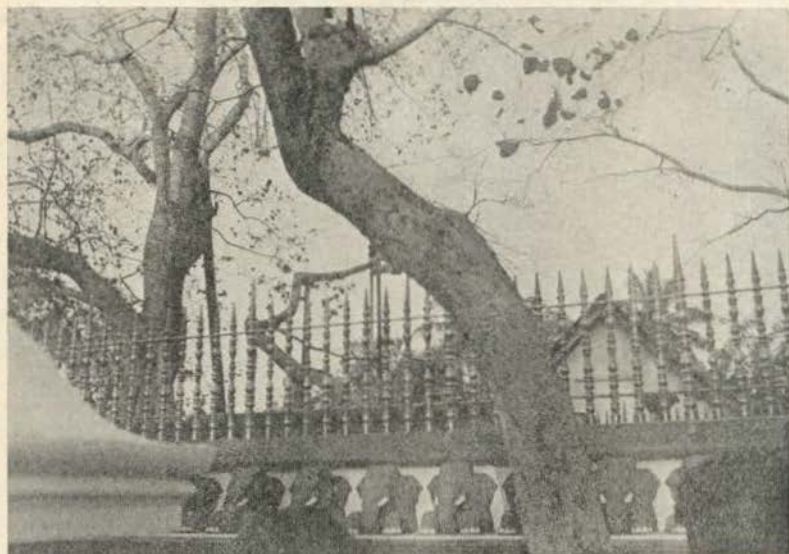
みやばやしあきひこ
宮林昭彦

○
朝の陽光がまばゆいジェット機の小窓より下方を眺めると、エメラルドの海と真白な海岸線の波頭とが島を覆っている深緑の鮮やかなコントラストが目染めた。世界地図で見るとちょうどインドの海岸線は首輪のごとく、その先きに吊した真珠のような位置に存在する島、それがセイロンである。「ライオンの島」へ錫崙／＼という、いかにも猛々しい印象をあたえるが、われわれ日本人にとっては、なんとなく魅惑にみちた国である。

現在、正式には「スリランカ共和国」とよばれるが、

スリは、公用語のシンハリ語で、「聖なる」「光り輝く」という接頭語で、ランカはセイロン島を意味しており、強烈な民族意識を示している。スリランカの歴史は、アジアの多くの国々と同じように、植民地支配のクビキから離れて、開発途上の国として歩みだしたのである。一五〇五年以来、ポルトガル、オランダの支配をうけ、一七九六年からイギリスの直轄植民地となった。一九四八年に自治領として政治的に独立を達成し、一九七二年に英連邦加盟の完全独立国となって現在にいたっているのである。

セイロンは、インド文化国であるが、紀元前五四年か



マヒンダの菩提樹

ら仏教国家としてシンハリ王朝が二千年にわたって栄え、貴重な仏教遺跡が現存しており、一般的には、紅茶と寶石の世界的産地として、エキゾチックな夢をいだかせる国である。たしかに訪ねてみると、気候は熱帯圏に属するが海に囲まれているため海からの涼風がふき、比較的湿気が少く、二十七・八度で凌ぎよかった。人口は一三〇〇万といわれる。仏教徒のシンハリ族が七〇パーセント、ヒンズー教徒のタミール族が二三パーセントを占め、そのタミール族は、かつてインドから侵入したインド・タミール族と英国統治時代の労働者として移住したセイロン・タミール族に分れている。そのほか、原住民のヴェダ族、アラビア人、マラヤ系欧州人などの混血がみられる。いうまでもなく、仏教は国教であり民衆にあたえる影響は大きい。公用語はシンハリで、北、東部ではタミール語が話され、言語の問題はなかなか複雑のようである。

○

コロンボの空港に下り立ったわたしたちは日本仏教代表団一行ということもあって、にぎやかな鳴りもの入り

と踊りの歓迎を受けた。文部大臣、マハボディンサイア
ティ代表のダンナディサ大僧正の歓迎も、日本とスリラ
ンカは同じ仏教国であるから、仏教を通じて世界平和に
寄与したい旨のスピーチがなされた。そのときふと思ひ
出したのが、三十余年前のこと、サンフランシスコ講和
条約におけるセイロン代表の発言である。当時の大蔵大
臣であったジャイワルネデ氏が「うらみにはうらみをも
ってしてはならない。うらみなき心によつてのみ、その
うらみをとくことができる」という『法句經』の有名な
一節を読みあげて賠償を辞退したということである。政
治体制は異にしても、同じ仏陀の報を信じ行じていく人
間同志が、宗教を通して心を開いて、平和へのあゆみを
つづけることはすばらしいことである。

わたしたちは、心温まる歓迎をうけたのち、仏教の遺
跡をめぐることとなった。空港より車で海岸線を走り、
ネゴンボを経て、アマラダブーラに向つた。

いうまでもなく、仏教が世界宗教として足跡を残す原
動力は、アシヨカ王の仏教外護と伝道師の派遣である。
アシヨカ王は、即位七年ほどで仏教に帰依したが、カリ
ンカ征伐において戦争の悲惨さを身にしみ深い罪悪感に

かられて、いよいよ慈悲と平和の説く仏理のみ教えに傾
倒し、仏教を政治理念として、国家建設を目ざされた。
アシヨカ王の政治理念は、各地に石柱を建て、岩壁に法
勅を刻みつけて、国民に仏教精神の徹底を計つたのであ
る。アシヨカ王の信条は、一に国民の守るべきものは「法」
である、二に生物をいつくしむ、三に真実を語る、四に
寛容と忍耐をおこなう、五に困窮者を助ける、などであ
る。これらの理念は、人間の本質は平等であるという仏
陀の教えに基づいてのべられ、王自身も法の実践につと
め、各地に仏塔を建立した。そしてインド以外の国外に
伝道師を派遣し、仏教が国境を越えてアジア、および世
界に宣布されるようになった。

○
セイロン島には、マヒンダが派遣された。マヒンダは
アシヨカ王の子供であるといわれる。はじめて仏教が伝
えられたのが、このアマラダブーラである。

紀元前五世紀ごろから栄えたといわれるセイロン最古
の都である。緑につつまれ案外に清潔さが保たれ、わた
したちが訪れたのは夕景のせいもあって、静寂につつま

れた感を深くした。古く仏教の聖地として法燈がまもられてきたが、十一世紀ごろにはインドのタミール族の侵入が激しくなるにつれて次第にきびしくなり、やがて古代の王宮や堂宇などの建造物の多くは土砂に埋もり、樹木が生え茂って、まったく忘れ去られてしまった。しかし一九一二年にいたって考古学者たちによって発掘され整備されたものである。緑の深い林のあちこちに点在する仏塔などは、たいへん古びた趣があり、なかなか興味深いものがあつた。

アマラダプーラで最初に車を下りたのは、イシユルム



リヴァンバリの仏塔

ニイ寺院である。境内に入るのに靴をぬぎ素足で白砂をふみしめながら堂内に入ると、そこに十五メートルぐらいの涅槃像が祠られてあつた。拝んだのちその片側にやはり涅槃のおすがたの像があるのに気づきたずねると、それがマヒンダの像であるという。案外にみすごして通過してしまふようであるが、あらためて伝道師としての聖マヒンダに想いを馳せたのである。このアマラダプーラの東十二キロのところに、セイロンにおける仏教発祥の地、ミヒンタレーがある。この国に仏教をはじめて伝えたマヒンダが、デバーナムピヤ・チツサ王と会見したと伝えるところである。またこのアマラダプーラには菩提樹が多い。アショカ王によって送られたものが方々に植えられ、現在も、仏陀伽耶の釈尊成道当時の菩提樹が移され代は移っても厳然と伝えられている寺院も存在する。

石柱が千数百本が立ち並んでいるのは、むかし木造九層の高楼だったという宮殿跡であつたり、二世紀に建立されたといわれる高さ九二メートルのリヴァンバリ仏塔や、釈尊の鎖骨を祀つてあるトウバラタ仏塔など、目をみはるものばかりであつた。

(つづく)

日本仏教の宗派

[2]

南都六宗(二)

三論宗

インドの大乗仏教において、初期の經典がほぼ出揃った頃、主として『般若經』の空思想を根拠としてその哲學的考察を展開したのが、竜樹(ナーガールジュナ、一五〇—二五〇)である。その主著は『中論頌』であり、ほかにも『大智度論』や『廻諍論』など幾つかの論書を著したとされている。すべての存在現象を縁起するもの(ものごととはお互いに関わり合いながら相依性として仮に成立している)、つまり無自性(ものごとに固定的な実体性はない)として捉える空觀に立脚した姿勢で、その思想は一見否定的かつ虚無的であるが、中道思想はその積極的な実践論である。そして大乗仏教のその後の思想的展開は、この竜

樹を出発点とするといっても過言ではない。事実、竜樹を祖としてインド仏教では中觀派という学系が発展するが、後の瑜伽唯識派やさらにはインド哲學の諸学派への影響もまことに大きかったのである。古来、わが国では「八宗の祖師」として仰ぎ、各宗派が大乗仏教の創設者として広く尊敬していたのである。

竜樹の思想系列の直接の継承は、『百論』を著した聖提婆(アーリヤデーヴァ、一七〇—二七〇)である。空の哲學はいよいよ止揚されて、その後の中觀派の流れはいずれも根本論書『中論頌』への注釈書を著作することによって次第に確立されていく。インドでは、五世紀に仏護(ブッダパーリタ、四〇〇—四七〇)が出て、ブラーサンギカ派を起し、さらにこれに対して六世紀の清弁(バーヴァヴィウニカ、四九〇—五七〇)はスヴァータントリカ派と称して仏護の解釈に鋭く対立した。そして七世紀には仏護の学系を継いだ有名な月称(チャンドラキールティ、一六五〇—)の登場によって、中觀派はさらに盛んとなるが、この系譜はチベット仏教の主流として今日にも伝えられている。

ところで中国への流れにおいては、三論宗の開祖とさ

れる姚秦の鳩摩羅什（クマールジヴァ、三四四—四一三）によつて、『中論』（竜樹の偈頌に對して青目・ピンガラの註釈したもの）、『十二門論』（竜樹の著作とされているもの）、『百論』のいわゆる三論が漢訳され、道生（三五五—四二三）、法朗（五〇八—五八二）などを経て、隋の嘉祥大師吉藏（五四五—六二三）によつて三論宗として大成された。吉藏は羅什訳『中論』への註釈書として大書『中觀論疏』をものしたが、三論教學の根本要義を概論風に著わした『三論玄義』が、むしろ三論宗としての認識をもつ根本聖典である。そして、『中論』、『十二門論』、『百論』を通申論として中心の柱にしたわけであるが、その際に『大智度論』も別申論と稱して依用したのである。その教義は『中論頌』冒頭の八不論（不生不滅、不一不異、常不斷、不去不來）や二諦説（眞諦と俗諦）を核心として捉え、相対的な思考を越えた視点で概念的な見解や判断をすべて執着として打ち破つて行く力強い姿勢は、他宗の誤まりを否定し自宗の正しさを顯揚する『破邪即顯正』の立場で一貫されている。いずれにせよ吉藏の主張は、「至道は言亡慮絶にして、四句を絶し、百非を絶す」という徹底した空義を標榜したわけである。それは、一切

皆空、無所得空の立場であり、三論宗が空宗とか無相宗、あるいは無得正觀宗とか呼ばれる由来もここにある。こうしたことは、中道の実践を表面に立ててはいるものの學問的側面がおのずから重視されて実践修道の方面は次第に薄らいだものとなつていった。中国十三宗の一つ、さらには日本八宗、南都六宗の一つでもあるが、この宗旨が後に各宗派に吸収されていつてしまったのは、こうした理由からである。

日本への伝來は、吉藏に直接學んだ高句麗僧の慧灌（一六八一）が推古天皇三十三年（六二五）に伝え、元興寺に住して宣揚した（初伝）。その弟子の智藏（六二五—六七二）は入唐して、帰国後は法隆寺に於て三論を講學した（第二伝）。智藏の弟子たちのうち道慈（六七〇—七四四）は養老二年（七二一）、唐から歸り大安寺で諸學をあわせて講義したが、これを大安寺流という（第三伝）。また智藏の弟子智光（七七六）と礼光（七七六）は、元興寺流として講學に勵んだ。しかし平安時代以後になると、華嚴宗東大寺に伝えられるだけとなり、鎌倉時代には明遍（一二四二—一二三四）などが三論の學匠として南都の教學の興隆に努力したという程度である。（原 裕）



自念仏と他念仏

浄土教の流れ

△七▽

竹中 信常
たけ なか しん じょう

(大正大学教授・文博)

に「思う」といってもいろいろの思い方がある。『那先比丘経』上巻に、念を生ずる場合を十六通り挙げている。

— 〇 一 〇 —

念仏ということを分けてみると、「念」と「仏」とになる。「仏」が阿弥陀仏にまで凝結したことは前号に述べたとおりである。そこで今回は「念」の方を考えてみることにする。「念ずる」ということは「心の中に思うこと」である。ひと頃はやった「念力」などのように、一つことを一所懸命に想うことである。ところが、一概

一 久遠所作（はるか昔にしたことを念ずる） 二 新学（あらたに学んだことを） 三 大事（大事なことを） 四 思善（よいことを心に浮べて） 五 受苦（苦しみを受けたことを） 六 思惟（みづからひとりでに念ずる） 七 雑所（いろいろの行為について） 八 教人（人に念ずることを教えて） 九 形象（形のあるものを見て） 十 忘失

(忘れていたことを思い出して) 十一 因識(ものごとの原因を知って) 十二 校計(ものごとを調べたりして) 十三 負債(負い目を考えて) 十四 一心(一つことに思いを凝して) 十五 読書(本を読んで) 十六 曾集(かつて心にかかったことを)

カッコ内は筆者の自己流の解釈ゆえ、あるいは間違っているかも知れぬが、要するに、人間とはいろいろの場合に、心にいろいろの仕方で思念するものなのである。やや古いが梟芳環という人の説では、「念」という字の原意に六つある。一は記憶すること、注意すること(把住性) 二には思い出すこと(想起性) 三に欲求し愛恋すること(渴望性) 四には深く考えること(考察性) 五には思い描いてみることに(記述性) 六には口で唱えながら思うこと(念誦性)とである。この場合の念は大体において、心の中にしつかりと思ひ浮べ、これに意識を集中することである。

いろいろいうようだが、梵語の大家だった故萩原雲来博士は、漢字の「念」のものと梵語は少くとも二つあった。その一つはチッタ citta という語、他の一つはアヌ

スムリテイマナシカール anusmrtimanasikāra で、前の語は思想・考え・想念・心を意味し、後の語は憶念・随念・思惟・作意を意味するとのことである。いうなれば前者は念ずる心そのものをあらわし、後者は念じ方をあらわしているといえよう。

このように、「念」ということにはいろいろな意味が、特に梵語の世界では考えられる。しかし、わたしたち浄土門の人間にとっては「念」は一つしかない。それは念仏の念である。字で書けば南無阿弥陀仏であり、仕方はいえ「称」えることである。ではなぜそうなったのか。

— 〇二〇 —

ナムということが「帰依すること」であることは前号で述べたとおりである。そしてこれは釈尊の在世からずっと今日まで続いてきている。問題は「念」がなぜ「称」になったかということである。

仏教では、釈尊の悟りへの修行の時代からすでに、静かにちつと心を統一することが大切なこととされてきた。今日でもこれは禅宗に伝わって、坐禅思想がおこな

われている。それゆえ、念仏はじめは静かに心の中に仏のことを考えることであった。これを「観仏の念仏」という。心の散乱をとどめ、妄念を払い、仏の相好光明または法身実相などを観察し、心に憶念することである。

観念の念仏に三種ある。観像と観相と実相とである。

観像念仏というのは心に仏の尊像を思い浮べ、その像に思いを凝らして心を統一し、禅定の境地つまり鏡のような心境に達するためにする念仏で、この念仏には仏に対する帰恭敬の情がこめられており、それゆえに釈尊在世の頃からおこなわれていたものである。観相念仏とは仏の功德相好を觀じ、その功德を思念し、それによって解脱を得ようとするもので、いうなれば仏のはたらきとその功績を深く念ずることなのである。実相念仏とはむずかしいかと「自身並びに一切諸法の真實自性なる法身を觀すること」である。ひらたくいえば、すべてのものの真實のあらわれをありのままに觀想することである。したがってそれはどれと云って形にあらわれたものでなく、いわば原理とか真理とか目に見えぬものを心の中で考えて、これに思いを凝らすのであるから、何か形

のあるものを念ずるよりはむづかしいし、またそれだけに思想的に進歩したものである。つまり「法身仏」の思想が成立してからのことといわれる。

ところが、法然上人は『一枚起請文』の冒頭で「もろこしわが朝にもろもろの智者たちの沙汰し申さるる觀念の念にもあらず……」といわれているように、このようなむずかしい念仏では多くの人々は救われないことを宣言されているのである。思想の上では、たしかにすぐれているにしても、實際におこなえない念仏では、絵に描いたボタ餅と同じである。ボタ餅はたべてみてはじめておいしいのである。念仏も自分がしてみても、はじめてありがたいのである。

インドのような暑い国では、涼しい木蔭や森の中で静かに坐していることが理想とされる。仏道の修行に禪定が重んじられたのもそのためであった。ところが、これと並んで、インドには古くから「声」を神聖なもの、尊いものとする風習があった。古代インドの吠陀では造一切者を「語主」と名づけており、シャッタバタ・ウパニシヤドでは語がただちに全宇宙であるという。声そのものが尊いとする考えは、やがて自分の信仰を声に表現する

ようになる。プロテスタント神学の大家トゥールナイゼンは、

「イエスの名を呼ぶことによってわれらが救われるということ、このことがバイブルの内容のすべてである」

といっており、危機神学の代表者カール・バルトは、

「初代プロテスタント教にとって信仰は信頼であり……人がインマニエルに身をゆだねること（信頼）すなわち信仰である。そして、インマニエルに身をゆだねることは、日夜にインマニエルを称念することである」

ともいっている。すべて、神の名を声に出して称念することによって、自分の信仰をあらわしているのである。仏教でも古くは、釈尊の滅後教団が上座部と大衆部とに分れる原因となった五つの事柄の中の一つに、「道は声に由るが故に起る」ということが問題になった。それは大天（マハーデーヴァ）が自分の犯した罪を夢の中で「苦

なる哉」と叫んだといつて、弟子たちが「なぜ叫んだのか」と問うと、「聖道の智慧は絶叫によって起るものだ」と答えたのである。現代風にこれをいうならば、宗教というものは頭での理解だけではなく、声に出して自分で自分に言い聞かせねばならぬ。つまり具体的に行為化してはじめて本当の宗教といえるのではないだろうか。念仏もまた同じで、ただ黙って念ずるのも結構だが、それよりは、口に出して唱えることによって、その信仰は確かなものとなる。しかも、仏の名を唱えるということには大変深い意味があるのである。

— 〇三〇 —

キリスト教でインマニエル・アーメンとなえるのは、「神われらと共におわす・イエスなる者よ」ということで、つまりイエスの名を呼ぶことになるといわれる。念仏でナムアミダブツと唱えるのも、むろんアミダブツの名を呼ぶことである。このように、神や仏の名を呼ぶということは、信仰の世界では、名と本体が同一だと信じられているからで、『浄土宗辞典』にはこのとこ

ろを次のように書いている（第一巻・四二六頁）。

「……声は名と結合してすぐれて宗教的意義をもつ。

神話的思想では、名乗り・名付けがその名の存在の端緒であるから、名は存在の本質的要素・力である。神の名において讃えられ、神の名において決定的な行為がなされ、人間や事物の名に特別の意義とはたらきが認められるのは広く諸宗教にみられるところである。

ここにおいて、呼ぶ声と呼ばれる名とその名の存在・人格とは相即的である。浄土教信仰では観經疏四・選撰集七のように、仏・菩薩の名号はその実体、はたらくと相即不離であって、なканずく阿弥陀仏はその名号を呼ぶ声に即応する生きた人格である……」

文章は少々むずかしいが、要するに名前を呼べば、呼んだもの（衆生）と呼ばれたもの（仏）とが一体になるということなのである。

念仏を辿ってここにまで至っていきさかふりかえってみると、そこには一つの流れがあることに気づくのである。それは念仏をする目的、何のために念仏するのかと

いうことの意味が大きく変化しているということである。ごく原始の時代の念仏は、敬尊に対する尊敬思慕信願のためのもので三帰三宝に要約される。それが信仰的に変って、生天・抜苦・求救のための念仏となった。しかし、念仏が念仏としてはっきりとした形をとるようになったのは『般舟三昧經』・『觀心三昧經』などに至ってからで、これらの念仏はいわゆる觀念々々であり、みづからの仏道修行のための念仏であった。いいかえれば「さとのための念仏」であり、これには強い意志の力が裏づけとなっていた。これを仮に「意の念仏」または自分のさとのための念仏という意味で「自念仏」と呼んでおこう。これに対して、浄土信仰がさかになり、念仏がナムアミダブツにしばらくするようにになると、自分とアマミダブツとが向い合って、アマミダブツの名を唱えることで往生ができるという意味で「救われるための念仏」となった。この念仏はアマミダブツを信ずるという心情が裏づけとなっており、自分ではなしにアマミダブツを念ずるという意味で「情の念仏」であり、「他念仏」であるということができるのである。念仏はこうのように、意から情へと大きく輪曲したのである。



法数術語十二ヵ月（七月の巻）

たから
宝 田 正 道
だ まさ みち

七^{しち}覚^{かく}支^し

支（心を集中して乱れない）⑦念覚支（平静な想いを保つ）の七つ。

七^{しち}箇^{かじょう}条^{きしやう}起^{もん}請^{もん}文

七事学、七菩提分ともいう。悟りを得るために役立つ七つの修行のあり方。すなわち、①択法覚支（各種法門のなかから心の状態に応じて偽りのものを捨て真実のもののみを選び取る）②精進覚支（もっぱら励み努める）③喜覚支（まことの教えを学び行う喜びにひたる）④軽安覚支（身心を快適に過す）⑤捨覚支（相手に執われることをやめる）⑥定覚

制誡七箇条ともいう。浄土宗祖法然が、元久元（一二〇四）年十一月、南都北嶺の迫害弾圧に対して門弟を誡め、山門に送った七カ条の起請文。末尾には、法然以下在京近辺の門弟百九十名が連署しているが、これによつ

て、いわゆを「元久の法難」を一応回避することができた。固有名詞であるが、特に加えておく。

七しち衆しゅう

仏教教団を構成する人々を七種に分けていう。すなわち、①比丘（出家修行する男性）②比丘尼（出家修行する女性）③優婆塞（在俗の男性信者）④優婆夷（在俗の女性信者）⑤沙弥（未成年の比丘）⑥沙弥尼（未成年の比丘尼）⑦式叉摩那（学法女、正学女と訳し、沙弥尼と比丘尼の中間で修行中の女性）の七種で、①②は具足戒を、③④は五戒を守ることが義務づけられており、合せて四衆という。また、③④以外の者を合せて五衆ということもある。

七種施しちしゅせ

『雜寶藏經』卷六などに説く、いわゆる「無財の七施」のこと。すなわち、捨身、心慮、和顔、慈眼、愛語、座床、房舎の七施であつて、金のない、どんな貧しい人にも

でもできる、思いやりとやさしさに富んだ言行から生じる施しの総称。

七重行樹しちじゅうぎょうじゆ

極楽浄土の莊嚴の一つである、七重に行列した並木。七重の解釈はいろいろあるが、善導によれば黄金、珊瑚、珊瑚その他の七宝が、根・莖・枝・条・葉・華・果の七つと七重に組みあわされた状態をいう。

七重羅網しちじゅうらもう

極楽浄土の莊嚴の一つである、七重に張りめぐらした珠玉の飾り網。

七重欄楯しちじゅうらんじゆん

極楽浄土の莊嚴の一つである、七重にめぐらした玉垣。一段に仏塔を囲むようにその外側に配置された石その他の垣根を「欄楯」という。

蓍多羅僧のこと。三衣の一種で、七条を横に綴ってつくったものであるが、後には七条袈裟と称して、もっぱら法衣のうえに着ける金欄製の豪華なものをさすようになった。

七条しちじょう

七堂伽藍しちどうがらん

七に特に意味はなく、完全に堂宇が揃っていを寺院をさす。宗派によって内容も名称もいろいろであるが、大体において、金堂、講堂、塔、食堂、鐘樓、経蔵、僧坊などを具えたもの。

七難しちなん

七種の災難、『観音経』をはじめ、『仁王経』『薬師経』などに説かれているが、若干の異同がある。一般には、火、水、風の自然災害から、刀杖、惡鬼、枷鎖、怨賊な

どの人災までを含めて七つにまとめる。俗に「色の白いは七難かくす」というのは、色白の女性が特にこれらの災難から免れうるとした迷信から、他の諸欠点を補うに足る美德としたものらしい。

七福神しちふくじん

福を招くという縁起のよい七人の神仙たち。インド・中国・日本三国を仏教が流通する間、民俗信仰と結びついて特色ある七人の組合せができたものと思われる。すなわち、大黒天（三宝を愛し飲食を豊かにする神）、恵比須（商売繁昌を司るという神）、毘沙門天（甲冑を身につけ怒りの相を現わして仏法を守護する神）、弁財天（財宝を守る神）、福祿寿（人望を与える神）、寿老人（寿命の長い神）、布袋和尚（中国薬代の実在人物を模して円満な風貌をした神とする）の七人で、江戸時代黒衣の宰相といわれた天海は家康に説いてこれらの神々を天下泰平の徳を与えるものとした。

七^{しち} 仏^{ぶつ}

過去七仏の略。釈尊以前に現われた毘婆尸仏、尸棄
仏、毘舍浮仏、拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏の六仏
と釈迦牟尼仏とを合せた呼び方。

七^{しち} 仏^{ぶつ} 通^{つう} 誠^{かい} 偈^げ

過去七仏が共通して受持したという戒めの偈。偈文に
各種あるなか、迦葉仏の偈といわれる「諸惡莫作、衆善
奉行、自淨其意、是諸仏教」の四句一章が最も一般的で
ある。すなわち「もろもろの惡をなすことなく、あらゆる
善事を行い、みずからの心を淨める、これぞ諸仏の教
えなり」という意。

七^{しち} 葉^{よう} 窟^{くつ}

仏典の第一結集が行われたところ。仏滅後まもなく、
中インドの王舎城に五百の比丘が集り、大迦葉を司会者

として、優波離が律を、阿難が法を、それぞれ誦出した
といわれるが、その場所は七葉樹の密生していたところ
からこの名がある。

「浄土」教化トラクト

『おぼん』

B 6 判・表紙共八頁

定価一部二十円（二〇〇部以上 十八円）

送料実費

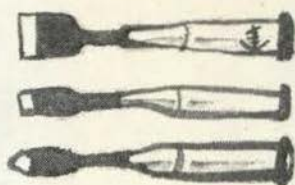
○檀信徒の皆様へのご施本用にどうぞ広くご利用
下さいませ。なるべくお早目にお申し込み下さ
い。ご便宜はできるだけおはかり致します。

発行 法然上人鑽仰会

念佛ひじり三國志 (七)

——法然をめぐる人々

寺内大吉



挿絵 松濤達文画

いずれも源泉は定朝(元喜五年——一〇五七年没)に発している。その弟子覚助が継承したのが奈良仏師派であり、弟子長勢が開祖となった流派が京都派である。

定朝が祖となったいわれは、彼が一代の名匠だったというよりも仏師の「地位向上」に力があったからだ。

定朝は宇治平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像を造立し、その功賞によって法橋の身分を与えられた。高位の僧階である。これまでの帰化工人である仏師では到底望み得なかったものである。南都北嶺で仕事をしていた仏師たちは、みな定朝の麾下へはいった。

平重衡によって焼かれた南都の復興は、東大寺の大仏殿だけではない。興福寺をもふくめて七堂伽藍のあらかたが焼亡した。この堂塔に安置されていた諸仏諸菩薩の復元も急がねばならなかった。

仏師が総動員された。

当時、仏師の世界は四家の名流によって支配されていた。

＜仏 師＞



前号のあらすじ

「寿永三年（一一八四）四月末、すでに平家は一の谷で破れ屋島へと落ちていた。その頃俊乗房重源は、放浪の歌僧西行法師の噂を求めて、高尾の神護寺に文覚上人を訪れていた。豪僧にして政事への関心もことさらに強い文覚は、重源を前に政治談義をととうと述べた。しかし重源には、文覚の山堂に随侍しているひとりの眉目秀麗な小法師がとりわけ興味をひいた。実はこの人こそ、後年『摧邪輪』を書いて法然上人に鋭く対立した梶尾高山寺の明恵上人であった。そして、この小法師も西行を歌心の師と仰いでいた。」

その高弟長勢は、法橋よりさらに高位の法印に進叙した。僧位としては超トツプクラスである。

長勢は京都の三条に本拠を置き、三条流あるいは京都派と呼ばれた。

この覚助と長勢を親として、それぞれが連枝分流を産みつつ二大名家として栄えてきた。

平安末期に至るまでの仏教は、いかに多くの堂塔を建立し、仏像を造営するかが信仰の表現であった。

その一例として、白河天皇は在世中に次のようにおびただしい造仏をしていることを佐藤昭夫氏は淡交社刊の『仏師の系譜』で紹介した。

絵像五四七〇体

生丈六像五体

丈六像六二七体

半丈六像六体

等身像三一五〇体

三尺以下の仏像二九三〇余体

藤原貴族またこれにならったから、仏師たちの多忙さは想像に絶し、榮耀榮華をきわめたのである。とりわけ地の利を得た京都仏師派において殷賑ぶりは甚だしかった。

南都焼亡のあと、造仏長官に任ぜられた左少将藤原行隆は、後白河法皇の意志を体して、ごく大ざっぱに仏師四家に興福寺復元の仕事を割り付ったのである。

金堂 法眼 明円

講堂 法印 院尊

食堂 無位 成朝

南月堂 無位(当時) 康慶

明円は京都仏師の直系であり、院尊また定朝から四代目の裔で、奈良仏師の正統である。成朝、康慶ともに奈良派の傍流だった。

人選が終り、仏師たちはそれぞれの工房で仏像の制作にかかったが、かんじんの容れ物、堂塔の工事が未だ端緒を掴めないでいる。うち続く戦乱で、費用の出所が明確でない。朝廷も藤原貴族も荘園との連絡が断絶し、その日暮しの有様である。

重源は、しばしば行隆邸を訪ねては、見通しを聞いた。だした。

「心配は無用だ。今少しの辛抱。こと興福寺に関しては全費用を出してくれるお方がいる」

「それは誰か」

「まだ言えない」

行隆は笑うだけだ。

重源にも推察はつく。鎌倉の頼朝であろう。

だとすれば、行隆が軽々しくその名を口にしない理由はわかる。すでに範頼、義経の軍勢が近江路にあふれ、命運は風前の灯だとは言いがた、未だ京都は木曾義仲の支配下にあった。軽口を洩らせば打ち首の目に遇うや

も知れなかった。

寿永三年正月二十日。

光堂の明遍僧都のもとにいた重源は、その夕刻、具足も新鮮な元氣横溢な兵士の行軍を都大路で見かけた。沿道には人々が群れて見物している。

「あれは？」

「九郎義経さまの兵です」

かたわらの男が説明してくれた。宇治川を押し渡って一気に京へ進撃してきたのである。木曾勢の敗兵にしては具足も新しく、表情も生き生きとしていた。

「木曾殿は？」

「さあ、いづれ一敗血にまみれて北陸へでも逃げ帰ったのでござろう。木曾の山猿は昔の古巣へ帰るのが一番柄に合っている」

峻烈な義仲評であった。都の市民たちは、旭將軍の無知と無暴を許さなかった。

隊列の先頭をゆくのは、美々しい騎馬の若大将だった。折から差しこむ冬の夕陽が、彼の横顔を抽象化する。

勝利の象徴——

市民たちはこの若大将が何者かをよく知っていた。

「佐々木の若殿だ」

「四郎さまだ」

「四郎さまは宇治川を一番騎で押し渡られたそうな」

賞讃の声が重源の耳に響いてくる。

宇治川の先陣は、梶原源太最季と争った佐々木四郎高綱だった。近江源氏の若大将。京都の市民たちは、やはりこの若者に地元意識をいだいていた。

重源の視線は、しかしいつまでも佐々木高綱を注目してはいなかった。隊列のなかに黒衣をまとった旅僧がまじっていた。彼の歩く動作を凝視していた重源は、とうとう叫び声を発していた。

「住蓮……住蓮房ではないか」

かりそめではあったが、念仏ひじりとして師弟の縁を結んだ若い住蓮房が、佐々木軍の列中を歩いているのだ。

重源の叫び声をじきに聞き分けた住蓮房は満面に笑みをたたえながら列を脱してきた。

「おぬし、九郎の陣中にあつたのか」

「いや、たまたま道づれになっただけです」

「道づれに？」

「私の父は佐々木殿の郎党で、馬淵に住していたのです」

「それだけの縁で？」

「まあ……」

住蓮房は言葉を濁している。何やら深く曰くがありそうである。

重源が現在どこに居るのか。二、三日中に光堂を訪ねることを約して住蓮房は再び列中へ戻っていった。

いちおう彼は、この行軍部隊に所属していると考えねばならない。

二一

佐々木勢を先陣とした九郎義経の軍団が入京した丁度その夕刻、木曾義仲は栗津の松原のなかで自害し果てていた。

従者はなかった。

侍大将の今井兼平が唯一騎、群らがる追手と戦っていた。戦う目的は一つしかない。主君の義仲に静かな最後を与える時間稼ぎだった。

義仲と今井兼平とは、木曾谷で幼時を共にした竹馬の友である。ひとたびは旭將軍となり、その帷握で権力を

ふるったこの幼な馴染みは、今もとの二人だけの世界へ回帰し、短かった生涯を閉じてゆくのである。

義仲の自害を確認した今井兼平は、

「是を見給え、東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本」

と、大音声でうったえたあと、白刃を口にくわえ、馬上からまっ逆さまに落ちていった。

ところで旭將軍木曾義仲が果たした歴史上の役割が何であつたか。

哀れにも義仲は一個のカリカチュアにすぎなかった。

源平両家が激突する壮大なオペラの序幕に登場し、前口上だけを述べて消えていった道化役だったのである。

にもかかわらず平家は、義仲の猪突猛進で戦意を喪失し、鎌倉頼朝はこの序幕のおかげで、対朝廷への政治的訓練をする時間を稼いだ。

頼朝は軍政、それも軍と政とのケジメを判然とさせた。京へはいった範頼、義経の大軍に、ことに軍司令官が朝廷へ接近することを厳禁した。休む暇も与えず、兵庫福原にまで巻き返してきていた平家追討に出撃させたのである。

しかも政は、代官の北条時政を入京させ、次々と朝廷や貴族の間で政治上のクサビを打ちこんでいった。それは政治に馴れた殿上人たちが眼をむくような素速さであり、緻密に計算しつくされたものだった。こと細かい点にまで及んでいた。

その細かい政治的布石は、興福寺の復元だ。仏師の選定にクレームをつけてきたのである。

「とにかく三条仏師は好ましくない、おろせと昨日北条殿から申し入れがあった」

造仏長官の左少将行隆は光堂に俊乗房重源を訪れると、憂鬱そうな表情で告げた。

三条仏師とは京都派の別称で、統領は明円法眼である。「明円法眼は平家のために沢山の祈願仏を造立した。それが佐殿には気にさわったのだろう」

あり得ることだ、と重源は思った。明円一族の平家への癒着ぶりは、仏師と顧客との関係を越えていた。

「それはわかる。鎌倉殿は明円だけではなく、奈良の院尊法印まで拒否してきた」

「何だと、院尊法印までか」

重源は声を呑まないではおれなかった。院尊仏師は奈

良派の直系である。彼を除外して南都の復興はあり得ぬではないか。

頼朝の意図が重源には読めない。もちろん行隆に不明だからこそ相談にきているのである。

オブザーバーとして傍らに坐る明遍僧都の智慧を借りねばならなかった。

「鎌倉殿は、なぜこと細かく仏師の選択にまで干渉してくるのか。興福寺はおのれの回所でもないのに」

問題の立脚点から説明を明遍は求めた。

左少将行隆は、昨暮には言葉をつまみかきながら興福寺の復元のスポンサーが頼朝である事実を明らかにした。木曾義仲の滅亡以前に後白河法皇へ申し入れてきていたという。

「興福寺を鎌倉殿がなあ」

と明遍僧都は考えこむ。やがて、語氣に熱が加わってきた。

それは、九条兼実に関連がある、と説きはじめていたのである。

兼実は藤原氏の統領だ。幸いなことに彼は平清盛の全盛期、積極的にその政治に協力しなかった。右大臣にと

どまっていた。言ってみれば戦争責任に無疵だった。

興福寺は藤原一族の菩提寺である。その復興に全面的に協力するということは、頼朝が次の京都政權の主軸に九条兼実を押し立ててくる構想だろう、と明遍は分析する。

この点については重源自身も先日高尾の文覚から聞いたばかりのことだった。

「その九条家と院尊仏師とは深い関係だ。いやそれ以上に法皇に愛されている」

重源は分析されても相変わらず不明な点を追究する。

「待てよ」

と、左少将行隆が言葉をさしはさんだ。

「興福寺に大毘沙門天がある。あれだ」

「毘沙門像……あれは焼亡直後に法皇のご下命で院尊仏師がまっ先に復元したものだ」

重源の反問を、

「法皇が何を目的となされて毘沙門天を復元なされたかだ」

と行隆はさえぎった。

あの時点で、平家は未だ官軍だった。叛乱者は木曾義

仲であり、鎌倉頼朝である。

法皇は天下の和平を祈願して院尊に毘沙門天を復元させた。当然、叛乱者である源家調伏がうたつてある。

「つまり院尊仏師は、源家調伏のために造立したのだ」

「しかし法皇のご下命では致し方があるまい。ただの仏師だ。言われたままに造仏するのが当然だろう」

「それもそうだな」

と行隆も言葉を詰まらせた。

明遍が決定的な政治分析をやったのは、この直後である。

「法皇のために、院尊は忌避されたのだ」

つまり後白河法皇は、ひとたびは頼朝調伏まで祈願した。この前禍を水に流して頼朝と握手するためには、責任を仏師にかぶせる以外に方法はないではないか。

と、明遍は説明する。

「仏師を忌避するだけなら誰にも傷つかぬ。鎌倉殿はこれで法皇とシコロを残さずに政治を共に出来るし、九条兼実を前面に押し立てて公武合体の長期政權も考えられるというものだ。また南都の復興は民衆にも頼朝公の平和主義を喧伝できることだしなあ」

明遍は戦慄が未だ漂っているなかで、これだけの政治布石を打ってくる頼朝の手腕に、あらためて舌を巻いている様子であった。

「明円も駄目、院尊も駄目とあれば、興福寺は康慶と成朝の両仏師でやるのか」

重源は、そんな政治とは離れた場で不安がる。

いずれも傍流だ。奈良の田舎仏師という印象しかない。

「あの両派には、ろくな作品も残っていないからな」

行隆も同調した。

しかし、このとき明遍がたいへん参考になる事実を語った。

明遍が高野山にいたころ眼にした大日如来像についてだった。

「田舎仏師と俊乗房は言うが、康慶の父親康朝がその大日如来の作者だった。願主は御堂関白殿だが、康朝は頑固に天平様の大日如来を造仏した。御堂関白は怒って、金剛峯寺に安置させず、遍照院という僧房の隅っこで眠っておったわ。しかし見事な作品だった。だから康慶の一族は、あれでなかなかの気骨者ぞろいではないのか」
権門に媚びず、仏師の芸域を守りぬく康慶一族。

重源の心に希望が湧いてきた。

復元は、ただの旧体復活であってはならない。そこに新時代の光りがさしこんでいなければ。

兩三度に及んで宋に渡った重源である。じつは天平の生々しい作風が、藤原様式で人形化した近年の仏像に不満をいだいてきたのである。

田舎仏師と侮られた康慶や成朝のなかに案外そんな新風を藏しているのかも知れない。

「とにかく近日うちに奈良を訪ねてみる。彼らの仕事を見て来よう」

と、行隆に約束した。

「相手の言いなりに従えば、当然費用も惜しみなく拠出してくれるはず。ひとつ是非ご足労を願おう」

行隆も愁眉をひらいた様子であった。

三

康慶仏師の上房は、春日山の山麓にあった。宏大な寺院ではない。ただの工房であった。まずそれが重源の眼をみはらせる。

近ごろの仏師は、工匠というよりも一種の請負い稼業なのである。手ずから荒取りやノミをふるおうとはしない。権力と財力で多数の下請け職人と契約し、思いどおりなものを作らせ、完成した作品を点検するだけで、あとは自分の銘を入れて納入する。

だから住居は、法印、法橋にふさわしい大伽藍だった。その奥に鎮座しまして政事と商売に明け暮れている。

京都派の一仏師の如きは、権謀術数を弄して、ついに清水寺の法主にまで成り上がった者もいた。ただし法主の座にあったのも月余、たちまち興福寺の僧兵に襲撃され、おん出されてしまった。

政治と密着するからこそ、今度の明円や院尊である。かえって政治の犠牲になって仕事を失ったではないか。

荒取りをしかけた樟が並ぶ康慶の工房へ一歩足を踏み入れた瞬間、重源は清潔な匂いを嗅いだ。

此処には間違いなく純粋な仏師がいます。

康慶の所在をたずねると、荒取りをしていた弟子がふり向いて、仕事で河内へ出かけているとのことだった。

「息子の……そうだ、運慶殿はいないか」

二三季度顔を合せたことがあった。

「運慶さまは、只今、写経中でございます」

「何、写経中だと」

これも珍らしい話だ。

仏師と言えば統領格は政僧か商僧だった。これに従う弟子どもは全くの職人気質で、信仰など微塵も持ち合せていない風なのである。

「長くかかりそうかな」

「いや、小半刻もすれば、此処へおりて来られます。いつも仕事にかかる前、写経をなさるのです」

「運慶殿は未だ若年のはずだが、殊勝な男だ」

しかし重源の眼は、工房の奥に並ぶ諸仏諸菩薩へ走っていた。完成されたもの、未完成なものが雑多に並んでいる。

内弟子に訊くと、これらは必ずしも注文の品ではないそうである。ふだんに此処の工房では、ノミを惜しまずに制作しているようである。

ひとわたり見わたして重源は、大きくうなずいた。期待してきたものは裏切られなかったのである。

そこには天平の息吹きが、荒々しいまでに発散していた。自由奔放な人間の理想像が塑彫されている。

藤原様式の類型化した人形ではなかった。

仔細に検分してゆくと、作風が二群にわかれていることに気づいた。

天平様式に忠実なものと、大胆と思われるまでにデフォルメ化された人間的な仏像群とであった。

「これが運慶殿の作だな」

重源は年若い内弟子に訊いた。デフォルメ化されたものを指さした。

「はい」

「すると、此方が父の康慶殿か」

「いや」

と、なぜか若者は顔を赤らめて首を振った。正統派の緻密なノミの跡は、重源の意に全くなかった作風であった。

「では誰の作か」

「私奴のものでございます」

未だ二十歳を幾つも出ていない見習い仏師は細い声で答える。

「おぬしは誰か。何という名か」

「快慶と申します」

無論聞いたことのない名であった。無名の若者だ。

「しかしこの弥勒像は、宋でも滅多に見かけることのない逸品だぞ」

「さようでございますか。お師匠さまのご指示どおり刻んだものでございます」

謙虚な態度に、重源は打たれた。若者をここまでに仕立てあげた師の康慶は並みの仏師ではないと思った。

「その康慶殿が、なぜ息子の子うした作風を許すのだらうか」

快慶は答えなかった。

別な声が応じたのである。

「許してはくれませぬ。しかし私は、私の信条にもとずいて」

きっぱりと言い切った若々しい声。

工房の入口に運慶が立っていた。

挨拶も前置きもなく、いきなり制作論へはいってしまつた。

弟子である快慶が、師康慶の作風を模すのは当然だ、と運慶は言う。しかし自分は息子であつて、弟子ではないのだ、と主張する。

「ではおぬしの師は誰か」

<金剛力士像>



「私の師は、会理仏師を初めとする天平の諸仏師がみな師でございます」

若い客気にあふれた言い方だが、必ずしも虚勢とばかりは言い切れぬ。現実には運慶の作風は、天平様式を土台にして自由奔放にノミがおどっている。

「あのころの仏師は……」

と、大先輩の俊乗房重源をとらえ、運慶は仏師の歴史を語ろうとする。

みんな無位無官だった。代表的な仏師とうたわれた会理（承平五年—九三五没）でさえが権律師に任ぜられたのが七七歳であった。

僧位僧官なぞ問題にせず、おのれの銘を刻みこむことすら意に介しないで、ひたむきに造仏に専念したのである。

だから無銘の天平仏は、みなわが師の作品なのだ、と運慶はまくし立てた。

そんな運慶と、かたわらで鞠躬如として控える快慶とを、重源は見比べずにはおれなかった。

重源は、やはりこの寡黙な快慶に深い好意を寄せた。そんな重源の心の動きを、運慶は白刃のような肌で感

知したらしい。

「あちらに観世音菩薩がございますね。私の作です。重源さまは、あれとこの弥勒像と、どちらがすぐれているとお思いですか」

重源は年がいてもなく圧迫感をおぼえて、たじたとなる。詰め寄ってくる運慶の気迫は凄まじい。

ふと、視線をかたわらの快慶へ流した。逃げたつもりである。

相変らず涼やかな眼もとでいる。

しかし重源はハツとなった。快慶の息づかいがおかしい。かたい沈黙を守りながら。息づかいだけは荒々しく昂奮しているではないか。

快慶もまた、この対決の場で審判を待っていたのである。

「どちらにも一長一短はある」

と、重源はかわさないではおれなかった。

ずっと後年になる。この日から二十年余りもすぎた建仁三年（一一〇三）東大寺の南大門建立を命ぜられた俊乗房重源は、そこに配する一对の金剛力士像を、運慶と快慶に制作させるのである。

すでに父の康慶は世に亡く、奈良仏師の統率者となっていた運慶は、快慶にこと細かな制作上の指示を強要した。それは旧来の作風に最も忠実な、妥協的な構図だった。

そのくせ運慶自身は、伝承をすべて捨てて大胆なデフォルメーションを力士像に加えた。お互いの制作は秘密を保ち合った。

左右の両力士が完成して南大門に並んだとき、運慶はアツと声を呑んだ。快慶の作もまた大胆きわまる形相骨格であって、おのれのデフォルメーションと寸分も異なっていないからである。

二体が並立すると、あたかも一心同体、「阿吽」（あうん）の呼吸はびったりだった。

すでに快慶は、師の息子である運慶のすべてを知りつくしていたのか。あるいは如何様にでも作風を転化出来る器用人であったのか。

運慶は快慶の足もとにも及ばず。

と判断したのは俊乗房重源だった。

重源は最後まで快慶を愛し、おのれの造立にはつねに彼をたのみ、運慶を重んじなかった。

（つづく）

二 編集後記 二

ふた親と二三日くらすお盆様

鬼三太

○また暑い季節がやって来て、都市部では七月盆を迎える。お盆の行事は、日本民族が長く伝えてきたゆかしい習俗であるが、お寺参り、お墓参りする人々の心も、年々変らないのが何よりも尊い。ひとつの伝統がいつも自然に繰り返され、多くの人々がこそって参加する行事であるのは、まことに意味深い。寺の境内や墓所でも、比較的若い世代の人たちを多く見かける、かれらがすべてが仏教を信じ、仏教を理解する人であるかは疑問であるが、亡き人を想う気持ちには人たるの差異はなからう。ともかく、こうした行事の営まれること自体に、多くの可能性が秘められている。仏教者はまずひとつには伝統的な行事をよく維持することが必要である。そして、今日さらに要請されるのは新しい教化の試みであり、そうした熱意ある姿勢への発心であろう。

○夏休みに入れば、学生たちをはじめとして多くの若者たちが旅へと誘（いざな）われる。そして日本全国のいたるところ、観光ルートの目玉商品として、あるいはそうしたコースをはずれた地方、いずれにしても旅先の土地ではどこにでも、歴史を背負った寺があり、またみ仏のたおやかなお顔がある。旅情に心を預けた旅人が、こうした環境に立てばおのずから何かを得るであろう。そのことはわが国の歴史と風土の根源にすでに仏教が深く浸み込んでいることからでもあらうが、ここにも逆に仏教側の、つまり実際に現に仏教を荷っていると考える仏教者たちの努力がより求められる要因があらう。

○さて、暑さ厳しい日々を送るにあたって、読者諸賢には呉々も健康に留意して頂きたい。また念仏生活の実践にも怠りのないように大いに精進してもらいたいのである。

真砂城

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 七月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十一年六月二十五日 印刷
昭和五十一年七月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒〇三 振替東京八一八二一八七番

日本図書館協会選定図書

宗教集団の今日と明日

A5判上製 定価2,600円 送料200円

既成仏教は人々の心の支えになれるものなのか—各宗を代表する宗教学者が、論文に座談会にホンネを出し合い仏教のあるべき姿を問うた宗教界注目の書。

——論文執筆者——

藤井正雄=浄土宗 桜井秀雄=曹洞宗 園田稔=神道
安斎伸=カトリック 井門富二夫=現代社会と宗教

——座談会出席者——

土屋光道(浄土宗) 市川智康(日蓮宗) 樟原宏明
(本願寺派) 持地紳行(立正佼成会) 峯岸忠哉(曹洞宗) ほか

〈藤井正雄論文=浄土教団の今日と明日〉

1. はじめに——問題の所在
2. 浄土宗教団の機構組織
3. 浄土宗教団の果たしている機能
4. 浄土宗教団のかかえる問題

本書では、既成教団は現実を乗り越えるための真の宗教的意義を主張できる教団なのか、それとも単に体制のワク組みにすぎないのかといった、目新しい視点が展開されてゆく。ユニークで新鮮な既成仏教白書である。〈毎日新聞〉

とっておくと必ず役に立つ……………

7月号別冊付録

布教教化特集号

月刊住職

教団のワクを超えた
身延山実践布教研究会の
本当の成果を全調査!

7月号発売

■現代に通用する!? 墓地規則を考える
■お寺にとって檀信徒とは何か? ■新興宗教の布教テクニック

ご購入は年ぎめ(6,000円+共)で、小社へお申込みください。

ご注文は現金書留で直接
小社へお申込みください。

金 花 舎

東京都新宿区大京町28
〒160 ☎(03)356-4741